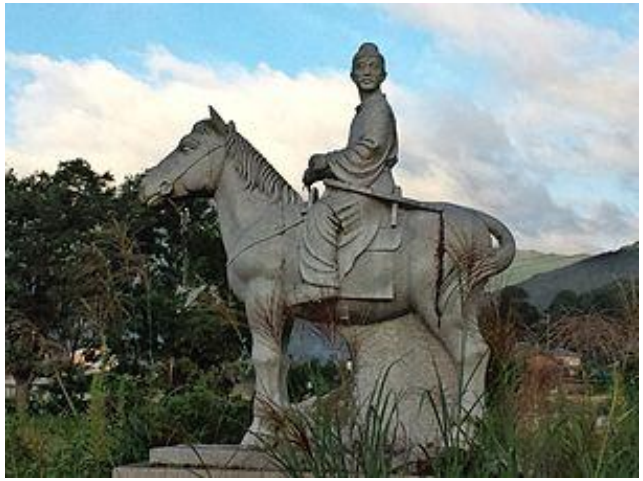
山の辺の道を歩く（天理から柳本まで）

日時：　平成三十一年三月二十日（水）ＪＲ天理駅十時集合

行程ＪＲ天理駅前（歌碑）→天理市役所前（歌碑）→石上神宮外苑（歌碑）→石上神宮鳥居前（歌碑）→石上神宮→内山永久寺跡（芭蕉句碑）→天理観光農園（昼食）→夜都伎神社→萱生環濠集落（歌碑）→手白香皇女御陵→衾路（歌碑）→天理トレイルセンター→黒塚古墳展示館→ＪＲ柳本駅

柿本人麿



阿騎野にある柿本人麿像

島根県益田市にある柿本神社

柿本人麿は万葉集に長歌十九首、短歌七十五首が掲載されており、万葉集を代表する歌人です。しかし、その生涯は謎が多く詳しい事は分かっていません。晩年に石見の国（島根県）の国司として赴任し現在の益田市で亡くなったと言われており益田市には柿本神社があります。人麿が活躍したのは持統天皇の時代ですが、日本書記や続日本紀には全く人麿の名が出ていないことから身分は下級官人として宮廷に仕えていたと言われています。平安時代になり人麿は神格化され歌聖と呼ばれたり三十六歌仙の一人に選ばれています。天武・持統朝は律令制が確立された時代で天皇は神であるとされ、人麿も天皇を称える歌を多く読んでいます。おおきみは神にしませば・・・のような歌です。

人麿代表歌

み熊野の　浦の浜木綿（はまゆう）　百重（ももえ）なす　心は思（も）えど　直（ただ）に逢わぬかも　巻四―四九六

現代語訳

熊野の浦の浜木綿の葉が幾重にも重なっているように、心の中ではあなたのことを幾度も幾度も想っているけれど　じかに逢うことはできないよ

天ざかる　鄙の長路ゆ　越えくれば　明石の門より　大和島みゆ　巻二―二五五

現代語訳

遠い国から長旅を続けてきたが　明石海峡から　大和の陸地が見える　（早く愛しい妻にあいたいものだ）

万葉歌碑

天理駅前バス乗り場東歌碑　作者不詳

石上　布留の高橋　高々に　妹が待つらむ　夜ぞふけにける　巻十二―二九九七

現代語訳

石上の布留の高橋の上で　かわいいあの娘がつま先立ちで私を待っている　ああ夜もふけてしまったなあ

天理市役所北西歌碑　作者不詳

我妹子や　我を忘らすな　石上　袖布留川の　絶えむと思へや　巻十二―三〇一三

現代語訳

いとしい人よ私を忘れないで下さい　石上の布留の川の流れのように　あなたを想う

私の心は途絶えることがないのです

石上神宮外苑公園入口歌碑　作者　柿本人麻呂

石上　布留の神杉　神びにし　われやさらさら　恋にあひにける　巻十―一九二七

現代語訳

石上の布留の杉の神木のように　私は年老いてしまったのに　いまさらこの年で恋に落ちてしまうとは

石上神宮鳥居横歌碑　作者　柿本人麻呂

未通女（おとめ）らを　袖布留山（そでふるやま）の　瑞垣（みずがき）の　久しき時ゆ　思ひき我は　巻十一―二四一五

おとめ達が振る袖ではないが　神宮の瑞垣は　長い時間が経ち神々しく美しい　私はあの瑞垣のように長い間あの娘のことを想ってきたのだ

内山永久寺跡の松尾芭蕉句碑（青年時代の宗房の頃）

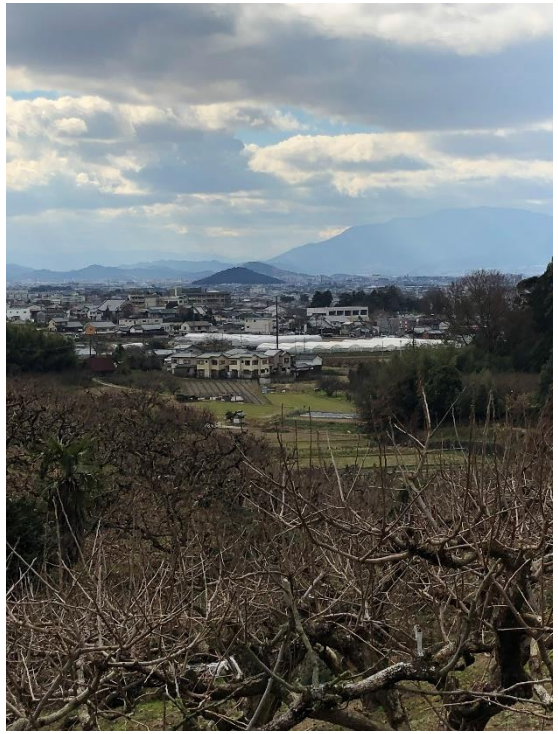
うち山や　とざましらずの　花ざかり

萱生町みかん共同貯蔵所前の万葉歌碑　作者　柿本人麻呂

あしひきの　山川の瀬の　鳴るなへに　弓月（ゆづき）が嶽（たけ）に　雲立ち渡る　巻七―一〇八八

現代語訳

山川の瀬の流れの音が高鳴るにつれ　弓月が嶽（竜王山）一面に雲がたちこめてきた



天理市中山町小路口　衾道の万葉歌碑　作者　柿本人麻呂

衾道(ふすまじ)を　引手(ひきて)の山(やま)に妹を置きて　山路(やまじ)を行けば　生けりともなし　巻二―二一二

（泣血哀慟歌(きゅうけつあいどうか)の反歌）

現代語訳

衾道を上っていき　引手の山（竜王山）に妻を葬って　山路をさまよい歩けば　悲しくて生きた心地もしない

人麻呂が涙も涸れはてるまで嘆き悲しむ姿が連想され、その哀切な響きは胸に訴えるものがある、よって泣血哀慟して詠んだ歌と名付けられた。この歌の詞書きに隠し妻を引手の山に葬ってとあるので、人麿には岩見国に本妻がいたものと思われる。

参考資料

手白香皇女衾田陵（西殿塚古墳）

手白香皇女は第２５代武烈天皇の姉で第２６代継体天皇の皇后である。第２１代雄略天皇や第２５代武烈天皇は皇位継承のライバルを粛正したので武烈が若くして子を成さずに亡くなった時、皇統の男系は途絶えた。そこで越の国から応神天皇５世の孫であるオホド王（継体天皇）が大王として迎えられた。５世であるから皇統の血はかなり薄くなっていたので王統の正当性を強くするため、継体は手白香皇女を皇后に迎えた。生まれたのが第２９代欽明天皇である。こうして欽明天皇が今日まで続く皇室の祖となったのである。継体天皇が当初、樟葉で即位したのも、大和の豪族が従わなかったからという可能性が強い。

衾田は歴代皇室の墓地であったため、継体は皇后を衾田に葬ったのであるが、宮内庁が指定している現衾田陵は６世紀前半に作られたものであり時代が合わない。白石太一郎氏によれば近くの西山塚古墳が真の手白香皇女御陵ではないかと述べている。その根拠は西山塚古墳の埴輪が今城塚古墳（継体陵）と同じ高槻市の新池遺跡で焼成されたものであるからとしている。